

(続紙 1)

京都大学	博士 (教育学)	氏名	松井 華子
論文題目	描画法の現代的意義に関する心理臨床学的研究 ―否定の作用と主体の生成に着目して―		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、臨床場面においてよく用いられる描画法について、クライアントが変化してきている中で、現代的な意義を検討することを目的としたものである。</p> <p>そのための導入として序章では、描画法の現在における位置づけの確認がなされた。描画法は、心理査定としても、心理療法の一技法としても用いられ、この両者はしばしば相容れないものとされてきた。また描画法は、投影法として分類されてきて、心の中の何かを“投影”しているものとして理解されてきた。しかし、描画法に心の中の何か“投影”されるという見方は、果たして現代の臨床現場で起こっていることに即したことであろうか。本論文はそのような疑問から出発している。</p> <p>第1章では、現代の心理臨床における変化について、先行研究において指摘されていることが概観された。現代の心理療法およびクライアントに多いあり方の特徴として、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”という視点を取り出され、イメージ体験と先に挙げた投影法について、これまでに論じられてきたことが再検討された。そして、描画法から3技法 (バウムテスト・スクイグル・風景構成法) が取り上げられ、“主体“ということと関わっての先行研究における理解について概観された。</p> <p>第2章では、主体という概念と描画の関係が調査によって研究された。主体の生成の葛藤に関わると考えられる対人恐怖的な心性と風景構成法表現との関連が数量的に調査された。その結果、風景構成法のいくつかの指標において対人恐怖的な心性との関わりが見出された。これらの指標の表すものの意味と対人恐怖的な心性との関連から、風景構成法は主体や自己意識を表現する場となりうることが示唆された。</p> <p>第3章においては、“主体のなさ”が特徴である事例が提示され、風景構成法が第2章で議論したものとは別の機能を持ちうるということが論じられた。</p> <p>ここでの風景構成法では、アイテムが描かれたり描かれなかったりという選択が行われたことが重要で、そこに「否定」する主体が生まれていると考えられる。これは主体の生成のために必要だとされる「融合」の「否定」の行為との関連から検討がなされ、主体の生成の場としての風景構成法の機能に焦点づけて考察された。</p> <p>第4章では、第3章と同一の事例で用いられた交互スクイグル (なぐりがき) について検討された。クライアントはスクイグルを行うことに同意する点では「融合」しながら、ルールのとおりには決して描かないという「否定」の行為が見られた。その</p>			

(続紙 2)

結果、自己像とみられるタヌキの絵が描かれたことで、主体の成立を見ることができると考えられた。したがって、スクイグルはその本質として「融合」と「否定」の関わる主体の生成の場という機能を含んでいるものと考えられた。

第5章では、イメージ体験と描画法との関わりについて、第4章で取り上げられたタヌキの絵のイメージ内容の面に関して検討が加えられた。タヌキに付与されているイメージの歴史的な変遷を辿り、タヌキには山と里、聖と俗などの対立するものの境界に出現する存在として捉えられてきたことが見出された。また、面接のプロセスで見られたクライアントの様子と重ねてみても、このタヌキイメージはクライアントのあり方の特徴と類似するところが多くあった。このことから、スクイグルにおける主体の生成とイメージの誕生の同時性が推察された。

第6章では、2つめの事例のバウムテストについて論じられた。テスト施行時の分析から、「混沌」「融合」に入ること、その「融合」を「否定」すること、その「否定」の描線を挟んでクライアントとセラピスト両者の「出会い」が生じること、などが指摘された。また、描かれた描線においてイメージが誕生することについても「見立て」の見地からあらためて論じられた。そして、バウムテストにおいては、閉じられたものとしての主体が生成すると考えられた。

第7章では、これまでの検討の総括として、「融合」と「否定」の作用の見地から、描画法が、あらたに“線が引かれること”“線が閉じられること”“線と線が関係付けられること”の3様相に分けて論じられた。

終章として、“「サイコロジカル・マインド」の欠如”という事態において、描画法は投影法と呼べるのかということが検討された。そのような事態において、「融合」と「否定」の行為の場として描画は機能し、それが主体の生成の契機となり、そこから「サイコロジカル・マインド」が生まれる可能性があると考えられる。したがってそのような事態では描画は、“内界にあるものの一部が外界に投影される”という意味での投影法とは呼び得ないことが結論づけられた。

また、補遺として身体を用いた<作業>としての描画法の意義についても論じられた。つまり、身体を用いて絵を描くプロセスの中で、物理的な抵抗や違和感を覚え、それが内と外との違和感や差異として心理学的にも自他を分かちものとして主体の生成を促進する可能性があると考えられるということである。

最後に、描画法についてと同じように、心理療法やそこで用いられる技法や概念は常に更新され、検討し直される必要があることが示唆された。

注) 論文内容の要旨と論文審査の結果の要旨は1頁を38字×36行で作成し、合わせて、3,000字を標準とすること。

論文内容の要旨を英語で記入するときは、400～1,100 wordsで作成し審査結果の要旨は日本語500～2,000字程度で作成すること。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は、発達障害や解離を症状とする者をはじめとして、内省する能力に乏しいクライアントが増えてきている近年の心理療法において、描画法の新しい意味づけを検討したものである。心理療法は自分で自分のことを内省し、それを表現できる主体性を持ったクライアントを前提としている。従って描画もその主体や内面の表現と考えられてきた。しかし主体性の乏しいクライアントにはこの見方は通用せず、逆に描画法を通じて主体を生成することが心理療法において必要になることを本論文は事例による検討から示している。さらには、描画法を通じて主体が生成する事態を分析することによって、従来の描画研究が描かれた絵というスタティックな産物を対象として解釈していたのに対して、本論文は描画が生まれてくるときの動きを微分的に捉えることを目指した、画期的なものであると言えよう。

序章と第1章は、本論文の準備となる部分である。先行研究から、心理療法においていかに「サイコロジカル・マインド」、つまり内省できる主体というものが前提となっているか、そしてそれに伴って、描画法が、主体の内的な世界の「投影」として捉えられてきたことが明らかにされる。それと同時に、近年の心理療法において、発達障害や解離性症状に代表されるような、内省能力に乏しいクライアントが増えてきていることが指摘される。またクライアントとセラピストがお互いのなぐりがきから形を読み取っていく「交互スクイグル」において、主体と主体の交じり合いが見られ、風景構成法において視点の確立という主体の契機が認められることから、描画における「主体」という概念が導入される。

第2章では、描画法の一つである風景構成法と対人恐怖心性の関連が数量的に調査され、描画における主体の概念が検証される。対人恐怖は、主体の確立に関わる葛藤を示していると考えられるが、対人恐怖心性の強い者は、風景構成法において視点場の位置が一つに定まっただけで、また混色が多い。これは対人恐怖心性における主体の確立を目指す方向と、それに伴う葛藤の存在を示唆していると考えられ、主体性の概念を裏づける興味深い結果である。

第3章以降では、2つの事例を用いて、描画と描画への治療的やり取りを通じて心理療法の場で主体が生成してくることが検証される。第3章から第5章まで、統合失調症とも発達障害とも考えられる「主体のなさ」を特徴とする困難な事例において、クライアントもセラピストも眠り込んでしまうような「融合」の時期を経たのちに、あたかもそこから分離が生じてくるかのように、風景構成法とスクイグルを通してクライアントの主体が生成してくることが取り上げられ、考察されている。第3章は、そのうちの描画の風景構成法における「否定」を通じてクライアントの主体が生成してくることに注目される。二人ともが眠り込んでしまうような「融合」

(続紙 4)

を体験した後に、セラピストはクライアントに風景構成法を描くことを求める。描くべき風景のアイテムが、順に教示されていく中で、クライアントが、アイテムを描いたり、描かなかったりという選択が行われたのが重要であることが指摘されている。そこに「否定」する主体が生まれてきたと考えられるからである。

第4章では、同じクライアントによるスクイグルが考察される。グルグルの線を描くように求められたクライアントは、それを否定して円を描く。それにダルマを見て完成させてセラピストに対してクライアントは、「ダルマはそんなんじゃない」と強く否定してタヌキを描く。ここでもグルグルを否定し、ダルマを否定する作用によって、描画を通じてクライアントの主体が生成してくる様子が見事に捉えられて、考察されている。またこれは、否定する主体が、タヌキとしての自己像という肯定に転換するポイントでもあり、それを本論文は的確に考察できている。

第5章では、否定から肯定に転換し、動きであった主体が形と内容あるものになったタヌキが、その象徴性や意味について考察されている。本来のユング心理学の方法論による分析とも言えるが、それを通じてタヌキの境界性が捉えられ、クライアントの自己像に非常に添っていることが示された。

第6章では、もう一つ別の事例のバウムテストから、主体の生成を読み取っている。ほとんどつぶやきだけで言葉にならないクライアントが、セラピストの言葉を否定してバウムテストにおいて3本の線を引き、それにクライアントもセラピストも秋の柿の木を見ていく。ここにおいても、言葉や形がないところから、否定によって描画が生まれ、それが主体、言葉、形の同時的な生成を促し、否定から肯定に転じる動きが生じていることを本論文は見事に捉えている。それを「微分」から「積分」に転じるなどというメタファーで表現しようとしているところも評価された。

第7章と終章では、描画法において、融合から否定を通しての主体の生成、そしてその時に言葉と意味が生まれてくることが考察されている。従来からの描画を対象とした診断的分類や象徴分析に対して、微分的な動きから主体と形が生まれてくることを捉えた本論文は非常に意欲的で斬新なものとして高く評価された。

試問においては、質問紙の選択と分析の問題や心理療法におけるアプローチへの疑問が呈された。せっかくの自験例から、もう少し自分の言葉で考察する必要性が指摘された。しかしこれらの問題点の指摘は、斬新で興味深い成果を生み出した本研究の分析のさらなる展開と深化を視野に入れたものであり、本研究の価値をいささかも下げるものではない。

よって、本論文は博士（教育学）の学位論文として価値あるものと認める。

また、平成25年 4月3日、論文内容とそれに関連した試問を行った結果、合格と認めた。

論文内容の要旨及び審査の結果の要旨は、本学学術情報リポジトリに掲載し、公表とする。特許申請、雑誌掲載等の関係により、学位授与後即日公表することに支障がある場合は、以下に公表可能とする日付を記入すること。

要旨公開可能日： 年 月 日以降